

小泉文夫の韓国音楽調査とその音源資料について ：予備的報告*

植村幸生

(東京藝術大学音楽学部)

〈차례〉

- 1.はじめに
2. 『日本伝統音楽の研究1』における韓国音楽に対する言及
3. 第1回韓国調査(1972年)
4. 第2回韓国調査(1978年)
5. 現存する音源資料の状況
6. まとめ

【要旨】

小泉文夫(1927~1983)は日本を代表する民族音楽学者である。早くから韓国音楽に関心を抱いていた小泉は1972年7月と1978年3月に韓国で音楽調査を行った。特に1972年調査では、韓国の音楽学者たちの協力のもと、韓国各地を巡回して訪問しながら、さまざまな音楽ジャンルの録音を果たし、その成果を《アリランの歌》というレコードにまとめた。この調査では仕事唄とわらべうたが特に重要視されたが、これは韓国音楽のリズムに関する小泉自身の高い関心を反映している。彼は韓国音楽を特徴づける「3分割リズム」が、仕事唄やわらべうたには顕著にみられないことを根拠に、民俗音楽のなかには、労働や動作に付随する「無意識の音楽」と、より独立的で「意識的な」音楽の間に境界があり、韓国では前者が後者へと「発展」する過程で「3分割リズム」が現れると説いた。労働と民俗音楽とのこうした関係は、彼が日本の民謡調査の経験から得ていた仮説であった。小泉はさらに「3分割リズ

* This work was supported by the Foundation Research Support Program for Korean Studies through the Ministry of Education of the Republic of Korea and Korean Studies Promotion Service of the Academy of Korean Studies(AKS-2015-KFR-1230003).

ム』の存在根拠を『騎馬民族』に求める特異な説まで唱えたが、これは韓国の音楽を汎ユーラシア的視点で考察する必要性を主張するための発言と解釈すべきである。小泉が二回の調査で収録した音源は、東京藝術大学小泉文夫記念資料室に保存されており、そこから小泉の調査意図を知ることができるが、レコード未収録の音声を分析することで、1970年代韓国における民俗音楽の様相についてより多くの情報を得ることができるだろう。

【キーワード】小泉文夫、民俗音楽、現地調査、録音、仕事唄、リズム

1. はじめに

小泉文夫(1927~1983)は日本を代表する民族音楽学者の一人であり、日本におけるこの分野の開拓者であった。小泉は『日本伝統音楽の研究1』(1958)において、日本音楽を総合的に把握した画期的な音階論を発表し、注目を浴びた。また彼は1957年から58年までインドに留学した。その後はアジアを中心とする世界各地で現地調査を行い、さらにテレビ、ラジオ等に数多く出演してその成果をわかりやすく語り、当時の日本人に『民族音楽』への関心を呼び起こした。彼は東京芸術大学教授として多くの研究者を育て、また学生との共同研究による、東京のわらべうた調査、沖縄民俗音楽の網羅的調査を展開した。さらに彼は文化批評の立場から、当時の日本における西洋音楽一辺倒の状況を批判する一方で、日本音楽への関心をあらためて呼び起こすことにもつとめた。彼は56歳の若さで世を去ったため、その研究成果を自ら集大成することはなかったが、音楽と人間の関係を普遍的に考える彼の思想は後続世代の研究者および音楽家たちに強い影響を及ぼした。

小泉文夫は韓国音楽に対して、早くから並々ならぬ関心を寄せていたが、実際に現地調査を行ったのは1972年と1978年の二回に過ぎない。しかも1978年調査は文化庁芸術祭公演の開催準備のために行ったものであるため、彼独自の現地調査は事実上、1972年の一回だけであったといってもよい。しかしこの1972年調査は、その後の日本における韓国音楽への関心に一定の方向づけを与えただけでなく、小泉自身の研究上の関心にも影響を与えるものとなった。また残された音源が、1970年代はじめの韓国音楽の状況を知る資料としての価値を持つことは言

うまでもない。本稿は、二度にわたる小泉文夫の韓国音楽調査の経緯とその成果を振り返り、また東京芸術大学音楽学部小泉文夫記念資料室¹⁾(以下、小泉資料室とする)に現存する音源資料の状況を報告することで、小泉の韓国調査を再評価することを試みる。

2. 『日本伝統音楽の研究1』における韓国音楽に対する言及

小泉の最初の著書『日本伝統音楽の研究1』は、前述のように、日本音楽に対する画期的な音階論によって広く知られる。ここで小泉は、『日本伝統音楽』の対象を、いわゆる邦楽の各ジャンルにとどまらず、全国の民謡、特に仕事唄やわらべうたといった基層文化の音楽、および沖縄音楽にまで拡大することによって、それまでのオクターブを単位とする類型論を批判し、4度の枠(テトラコルド)を単位とする類型論を提唱した。すなわち、4度間隔をなす二つの音(これを核音と呼ぶ)の間に、中間音が一つ置かれること、その中間音の位置によって、四種類のテトラコルドの類型が生じること、沖縄を含む日本音楽にはこの四種類がすべて用いられていること、テトラコルドの組み合わせによってオクターブ音階も構成可能であること、などを示した。

同書の最終章『音階についての諸問題』の後半では、このテトラコルド理論が、日本以外のアジアの音楽に対してどの程度適用可能であるのかを論じている。それは同時に、この理論を視点として、日本音楽をアジアの音楽文化のなかに位置付ける試みでもあった。そこにおいて比較分析のために取り上げられたのは、中国、韓国、インドネシアの音楽であった。

同章第5節『朝鮮の民謡とその音階』の冒頭で小泉は、本書には珍しく、当時の

1) 小泉の没後、夫人(声楽家の加古三枝子)が、自宅および研究室にあった一切の研究資料を東京芸術大学に寄附した。小泉文夫記念資料室は、その資料を管理し教育・研究に活用すべく1986年に開室した。現在は資料の管理および利用サービスを行うだけでなく、公開行事、webサイト上でのコンテンツ制作・提供を通じて、民族音楽学および音楽教育に関わる学内外の研究・教育に貢献している。所蔵資料の一部は同資料室のサイト(<http://www.geidai.ac.jp/labs/koizumi/>)から検索可能である。

政治状況に対する批判的な発言をしている(以下、引用は2009年版の合本より)。

「今日、日本と朝鮮は非常に不幸な関係に陥っているため、南北ともに連絡が充分とれず、文化交流もほとんど行われていないし、政治家ばかりでなく大部分の一般日本人も、実はその必要性すら認めていないのではないだろうか。だがこれはとんでもない間違いだといわなければならない。…およそどんな民族とも、文化交流をして相互に利益にならないためしはない。…『アジアは一つ』とか、『アジアの共通の問題に』とか、よく聞く台詞であるが、まず隣の国を理解することなくして、いったい何ができよう。」(小泉2009:206-207)

ついで、韓国民謡に関する利用可能な資料がきわめて少ない事実とその理由を次のように語る。

「これまで朝鮮の民謡を研究する人がほとんどなく、金素雲氏のような朝鮮出身者が、その主として歌詞の面での翻訳と研究を発表してきたものが、従来の資料の大部分であった。こうしたことの原因には、われわれの側の不勉強のほか、朝鮮の側にも大いに理由があって、民謡の研究をとくに困難にしていたのである。それは、流行歌や民衆歌曲、あるいは芸術歌曲、さらに『時調』のような文芸形態を除く、純粹の伝承民謡というものが、朝鮮ではとくに蔑視され、圧迫されてきたからである。…したがって芸術音楽の方面では、ことに雅楽(中国の雅楽を直輸入したもので、日本の雅楽よりももっと本源に近い)の文献や資料が比較的豊富にあり、また雅楽以外の俗楽である郷楽についても、かなりまとまった資料が保存されているにもかかわらず、民謡については一切の歴史的資料を欠いている。」(小泉2009:207)

小泉がここで分析に用いた民謡の資料は計120曲余りであり、金素雲²⁾による「

2) 金素雲(1908~1981): 詩人、随筆家、翻訳家。釜山に生まれ1920年に日本にわたる。1965年に帰国するまで主に日本で韓国文学、韓国文化の紹介と翻訳につとめる。『朝鮮民謡選』『朝鮮童謡選』は早くから日本で知られた。小泉は『日本伝統音楽の研究1』執筆時に金素雲に面会して情報を得た(小泉2009:217)。また小

朝鮮民謡の律調』(1928)という論文、および自身が数名の在日朝鮮人から直接採集したもの以外は、朝鮮作曲家同盟中央委員会編『조선민요곡집 朝鮮民謡曲集』に依拠したという(小泉2009:207-208)。彼はこれを「ほとんど地域的に網羅されている上に、かなり厳密な採譜で、大部分は信用に値する」(小泉2009:207)と評価した。なお同書第1集～第5集(1954～1955)は小泉資料室に現存している。³⁾

『朝鮮の民謡とその音階』の部分はさらに次の5項目に分けて論述されている。すなわち、①中国系の音階、②日本民謡と同系の音階、③朝鮮民謡の陰旋化、④第3の要素その他、⑤リズム、である。

第一の『中国系の音階』とは主として京トリを指しており、小泉はこれを日本における律音階と同種のものを見なした(小泉2009:208-209)。第二の『日本民謡と同系の音階』とは、小泉が『民謡のテトラコルド』と呼ぶものを指している。小泉が挙げた譜例に従えば、京トリの一部、およびメナリトリにそれが認められるとする(小泉2009:209-210)。第三の項目『朝鮮民謡の陰旋化』では、テトラコルドの中間音もしくは核音に隣接する音が半音程度下がる傾向が京トリにしばしば見いだされることを指摘した(小泉2009:211-214)。第四の項目『第三の要素』として挙げたものは、〈密陽アリラン〉〈チャジンパンアタリョン〉の二曲であり、このタイプはテトラコルドによる解釈が不可能だが、呂旋法(ド・レ・ミ・ソ・ラ)のミが終止音となる、もしくは非常に重要性をもつタイプが、朝鮮では比較的多く認められることから、もしかしたらこれが朝鮮の最も古い音楽的要素かもしれないと推測している(小泉2009:214-215)。

音組織をもつばら論じる本書において、韓国についてだけ『リズム』の項目を別に立てた点は、小泉が韓国音楽のリズムをいかに重要視していたかを明らかに示す。その特徴が『3拍子系』にあること、日本民謡と異なり、明確なアクセントが

泉資料室所蔵資料には、『朝鮮民謡選』(岩波文庫、1941年発行の5刷)ほか金素雲の日本語著作4点が含まれている。

3) 小泉資料室には『朝鮮民謡曲集』以外にも、朝鮮作曲家同盟中央委員会編の下記出版物が保管されている。『새노래』第2,4,6,7,8,9,10,11集(1955)、『동요 100곡집: 8.15 해방 10주년 기념』(1955)、『음악 유산 계승의 제문제』(1955)、『인민가요곡집』第2集、第5集、第6集(1954)、『조선인민가요곡선집』(1954)。これらも『朝鮮民謡曲集』と同時に入手されたものと思われる。

あるので拍子があいまいではないこと、シンコペーションがみられること、などを指摘している。「朝鮮のリズムのもっともすばらしい例は、杖鼓(チャンゴ)とよばれる鼓を大きくしたような太鼓のリズムである。…このリズムを聞けば、朝鮮民謡のすばらしさに本当に陶酔することができる。」(小泉2009:217)と述べて、この節をしめくくっている。

3. 第1回韓国調査(1972年)

1) 調査の概要

小泉にとって事実上最初で最後となる韓国調査は、1972年7月に、約3週間にわたって実施された⁴⁾。この時、小泉は自家用車を使い、関釜フェリーで海をわたり、自身の運転で韓国各地を走破した。この調査旅行には、小泉の門下生であり、当時東京芸術大学大学院生であった櫻井哲男が同行した。櫻井は調査への同行を終えた後にソウルから済州島に向かい、そこで民俗音楽の調査を行った。その成果は彼の修士論文『済州島の民俗音楽：民俗音楽研究方法の一試案』(東京芸術大学大学院音楽研究科、1973)、および学術誌論文『済州島の民俗音楽－音楽人類学の試み(1)－』(『音楽学』21(2)、1975年)として発表された。また録音物は、のちにCDシリーズ『地球の音楽』(日本ビクター、1992)中の三枚として発表された(VTCD-63~65)。

本調査には当初、同じく小泉の門下である草野妙子が同行する予定であった。草野はすでに1971年に韓国での調査を果たしており、韓国人研究者とも面識があった。草野の述懐によれば、小泉から草野に対して、本調査のための準備作業にあたってくれるよう依頼があったのは1972年6月初めのことであったという(草野2002:24)。草野は訪問地と順路の選定、関係者、関係機関への連絡、ビ

4) 現存する小泉のパスポート(資料番号01002)によると、東京の韓国領事館から、30日間滞在可能なビザ(status 7-10)が1972年7月4日に発給されている。

ザ取得のための招請状の要請といった準備をすすめた。しかし草野自身は直前になって同行を取りやめざるを得なかった。

調査の日程および取材内容は、彼が残したフィールドノート(小泉資料室所蔵、資料番号01019)から知ることができる。その最初のページには、移動日と訪問地が記入されている。ところが、各訪問地での取材活動がいつ行われたのかが、フィールドノートにも、収録テープ(カセットテープ)にも明記されていない場合が意外に多い。ノートの記入順から、その先後関係を知ることができるだけである。フィールドノートの記載内容から、その活動状況を読み取った結果を〈表 1〉に示す。

〈表 1〉 移動日および活動一覧(フィールドノートによる。活動日程の一部は推定)

	移動	訪問地、取材活動	備考
7/7(金)	東京発		
7/10(月)	下関発		
7/11(火)	釜山着	わらべうたの録音 梵魚寺 勤行の録音	
7/12	釜山滞在	新羅舞踊所訪問(録音なし) 水嘗で農楽、田植歌の録音	
7/14(金)	慶州を経て大邱着	慶州市立国楽院で録音	
7/15(土)	栄州着	義城で木挽き歌の録音 栄州で砵打ちの録音	
7/16(日)		カトリック教会でミサの録音 プロテスタント教会で礼拝の録音 時友会で時調の録音	
7/17(月)	原州着	浮石寺近くで田草取歌の録音	
7/18(火)	ソウル着		
7/19(水) ~23(日)	ソウル滞在	国立劇場民俗舞踊団 聖心国民学校 国師堂チノギクッ録音 国立国楽院(22日か) 奉元寺(常住勤供齋参観、梵唄) ソウル大学校音大	金廣胄氏より伽倻琴を購入か 散調牙箏購入
7/24(月)	全州着(夜)		悪路のため扶余行きを断念
7/25(火)	全州滞在	全州国楽院 全州農林高等学校	薛在洙氏より玄琴を購入
7/26(水)	慶州着	慶州博物館(エミレ鐘の録音)	
7/27(木)	釜山着		

7/28(金)	下関着		
7/29(土)	神戸・東京着		

小泉は、この調査期間中に国立国楽院で韓国国楽学会主催による講演を行った。『韓国音楽研究』第2輯には、これが『日本童謡のリズム』に関する特別講演であったと記している。⁵⁾この講演については、後述する『アリランの歌』解説および論説『三分割リズムと生活基盤』にも記述があるが、フィールドノートにはこの講演に関する記載はない。

本調査では各種有形資料の収集も行ったに違いないが、現存資料からその様子を具体的に知ることは難しい。小泉資料室には、韓国の楽器16種類19点、1972年以前に刊行された韓国語の書籍・楽譜21点(その他に年記不明の書物8点)が保管されている。また『韓国国楽精選』(金星出版社、1967)『国楽大全集』(新世紀、1968)『民謡三千里』(省音社、1968)など、1960年代後半に韓国でリリースされた大型のLP音盤集もある。これらのすべてがこの時の調査で入手されたものかは明らかでなく、ただ玄琴、牙箏の購入の事実がフィールドノートに記されているだけである。しかし少なくとも楽器に関してはその大半が調査時に入手されたものであろうと推測される。

2) 関係人物

小泉はこの調査において、李恵求、張師勛、韓萬榮、李在淑といったソウル大学の教授陣、国立国楽院長であった成慶麟、KBS在職中であった権五聖に面会し、多くの協力を得ている。草野妙子が回顧する通り、彼らは草野による事前準備の段階で連絡を受け、小泉への協力を約束したのであろう。実際、国立国楽院およびソウル大学校音楽大学では演奏の収録を果たした。李在淑はソウル大学校での収録時に竹坡流伽倻琴散調を演奏しただけでなく、ソウル聖心国民学

5) 『韓国音楽研究』第2輯、1972、153頁。

校でのわらべうた調査に便宜をはかったことがフィールドノートの記述からわかる。権五聖は労働歌のテープをきかせてくれたとノートにメモされている。また奉元寺での仏教音楽、国師堂での巫俗音楽の取材は、韓萬榮が儀礼の現場に小泉を案内しなければ不可能であったろう。こうしたことは、1970年代前半までに韓国における国楽研究の基盤が形成されていたことが、小泉の調査を円滑にするのに大きな役割を果たしたことを意味する。

小泉のフィールドノートには、おそらく現地ではじめて出会ったか、または前述の協力者からの紹介を得て、その場で協力を得た人物についても記している。さらにフィールドノート末尾には、この調査時に面会できなかった研究者として、羅運榮(延世大学校音楽大学)、李杜鉉(ソウル大学校師範大学)両氏の連絡先が記されている。草野が事前に連絡をとったものの、小泉とは会えなかったため、小泉から後日連絡をとったのかもしれない。

フィールドノートによって、本調査に直接関係したとみられる人物名を初出の順に挙げるならば次の〈表 2〉の通りである(肩書きは名刺もしくはメモによる)。

〈表 2〉1972年調査関係人物一覧

氏名	地域	役職	小泉のメモ
尹康姫	釜山	新羅舞踊所	
鄭大允		水宮古蹟民俗保存会理事長	
徐国英		釜山大学校文理科大学副教授、文化財委員会専門委員	
積元寂		梵魚寺総務	
尹賛求	慶州	慶州市立国楽院	
申完湜	榮州	長老会中央教会牧師	
申用湜		榮州時友会	
崔順天		長老会中央教会信者	「OK社」
張師勛	ソウル	ソウル大学校教授	
李惠求		ソウル大学校音楽大学長	
徐明錫		韓国弘報協会常任副会長	
韓慶源		同 業務部長	
李夕影		同 海外課長	
朴賛奎		同	「民俗舞踊団取材を案内」

李在淑		ソウル大学校	
金廣胄		国楽器製造研究所	伽倻琴、牙箏、玄琴の価格に関するメモ
韓萬榮		ソウル大学校	
成慶麟		国立国楽院長	
金星振		国立国楽院掌楽課長	「散調の楽譜をいただいた。」
権五聖		中央放送局プロデューサー	
崔勝範	全州	藝総全北支部長、全北大学校教授	「全州ですべてお世話になった」
薛在洙		韓国国楽協会全北支部長	「玄琴12000で買った」
洪龍虎		全州国楽院長	
張金東		韓国国楽協会全北支部副支部長	
朴日薫	慶州	国立慶州博物館長	

3) 調査の成果「アリランの歌」

調査で得られた音源は、そのなかから状態のよいものが選択され、LPレコード2枚組のアルバム「アリランの歌」(ビクター音楽産業、S JL-25~26、1973年)にまとめられた。一枚目は民俗音楽と宗教音楽編、二枚目は芸術音楽編と分けられていた。そもそもこのレコードの刊行が、調査の前提であり目的であったと思われる。このアルバムは2002年に、CDとDVDからなるアンソロジー「小泉文夫の遺産：民族音楽の礎」第7、8巻(KICE 7, 8)として復刻された。その収録曲は次の〈表 3〉の通りである。

〈表 3〉「アリランの歌」所収曲目一覧

	ジャンル	サブジャンル	曲名	演奏者・収録地	時間
1	民俗音楽	わらべうた	なわとび歌〈赤ちゃん〉	ソウル聖心国民学校	0:19
2			お手合わせ歌〈朝風〉		0:20
3			お手合わせ歌〈トシラコヘイ〉		0:28
4			しりとり歌〈お猿のおしりは赤い〉		0:39
5			まりつき歌〈ホルミコ〉	釜山市東萊温泉町	0:27
6			お手合わせ歌〈ピリポン〉		0:16

7		民謡(仕事唄)	砵打ち<アリラン>	栄州市青和旅館	1:06	
8			田草取唄	栄州浮石寺村	1:20	
9		民俗芸能	草刈唄<農庁農楽>	釜山市水宮	4:29	
10			トゥレック<農庁農楽>		2:03	
11			農楽長短	全州農林高等学校	2:01	
12		芸術的民謡	ユクチャベキ	洪龍虎(全州国楽院)	4:34	
13			慶尚道の密陽アリラン	慶州国楽院	1:37	
14		宗教音楽	巫女 (ムーダン)の 儀式	將軍ヌリ	ソウル市国師堂	2:10
15				大監ヌリ		2:11
16			梵魚寺の勤行	鼓楼の太鼓	慶尚南道梵魚寺	0:36
17				鐘と木棹		0:58
18				夕刻の礼仏		9:12
19	奉元寺の法要		引声	朴松庵、曹徳山、金 華潭(奉元寺)	4:02	
20			莊嚴念仏、功德偈		4:12	
21	民間の芸術音楽			伽倻琴散調	李在淑、安惠蘭	11:49
22			平時調の練習	栄州時友会、申用湜	3:54	
23			伽倻琴併唱<春香伝>より『思郎歌』	張順愛(慶州国楽院)	5:26	
24	国楽院の芸術音楽		合楽<歩虚子>	国立国楽院	3:35	
25			管楽<春鶯轉>		5:52	
26			管楽<劔舞>		4:23	
27			大琴独奏<堯天舜日之曲>		朴鐘大	7:34

ここで小泉が韓国音楽の全体像を描くにあたり、民俗音楽、宗教音楽、芸術音楽という三分法を採用する点、そして民俗音楽のなかでは、わらべうたと仕事唄を必ず含める点、全体として「単純なもの」から「高度に洗練されたもの」へと配列する点は、小泉が考える音楽民族誌の典型的な表現形態であったといつてよいだろう。すでに、小泉は1964年エジプト調査の成果を収めたレコードアルバム『ナイルの歌』(ビクター音楽産業、JL-66~71、1966年)において、これと非常によく似た構成を採用しているからである。

本レコードの解説は、のちに『韓国の音楽』と題して、単著『民族音楽研究ノート』1979年、303-327ページに収録された(以下、引用は同書による)。この解説では、各曲に対して、自らのテトラコルド理論を踏まえた簡単な音階分析を示している。たとえば、わらべうた<朝風>(トラック1)では「音階は…韓国民謡や芸術音

楽で最も基本的な形であるソドレ(ミ)の1種。子どもによっては、ミも使われるが、やがてソドレにまとまる。これは下の核音ソに対して、4度と5度の音が上に乗る形で、このあと[の曲に]もしばしば現われる」(小泉1979:312)、浮石寺近くの〈田草取唄〉(トラック8)では「音頭の部分は4度と3度の間が連続したペンタコルド、すなわちドレミファソ、それに続く一同のコーラスは、単純なソドの4度の枠。ただしこの4度は下降ポルタメントで連続している」(小泉1979:315)などと述べている。

しかし、この調査における小泉の関心が音階よりもリズムにあることが、この解説において次のように表明されている。

「韓国の民俗音楽を調べていて私の念頭を離れないことは、“何故韓国には3拍子が多いのか?”という疑問である。…この3拍子系のリズムの根元は、果して民俗音楽のどの段階からはじまるのか?という問題は、大へん興味深い。」(小泉1979:308)

そして、小泉自身の言葉を借りれば「“音楽以前の音楽”、ないしは“無意識の音楽”ともいうべき」わらべうた、仕事唄、物売りの声などに接した結果として、次のような所見を述べる。

「子どものわらべうたについては、先ず例の3拍子が思ったより少ないという点に注目しなければならない。…大人の「囃しことば」とか「唱えごと」、また演劇のセリフ、物売の呼声など、あまり多くの実例を録音することが出来なかったが、これも、3拍子が基本であるといった、確たる証拠や資料を発見することは出来なかった。…[仕事唄についても]本当に仕事と結びついた歌には、やはり3拍子の必然性は出てこない。…歌うとか、音楽を演奏するという意識よりも、仕事や遊びの主眼があり、附随的に歌がうたわれる時、3拍子という特色は未だはっきりと現れない。それが同じ仕事唄でも、仕事の単調なリズムに変化とはげみを与えようと、意識的に、そして歌うことを自覚して演奏するとき、突然3拍子が出て来る」(小泉1979:308-309)

この所見から、小泉は民俗音楽のなかで「無意識の音楽」と「意識的な音楽」に

大きな差異があることを指摘し、前者があまり目立たないために、普通はこの違いに気づきにくいのだと論じた。そして「韓国の音楽は、こうした民俗音楽の中の微妙ではあるが本質的な問題をとらえるためには最も打ってつけの素材であるかも知れない」(小泉1979:310)と付け加えた。

小泉は、アルバムとは別に書かれた論説『三分割リズムと生活基盤』において、これと同様の議論を展開しており、そこでは、この所見を国立国楽院での講演で発表したことと、それに対する聴衆の反応を記している。

「私は今発見したばかりの事実を韓国の友人たちにも聞いて頂く意味で、リズムの問題をとり上げた。…釜山からソウルに至る道中で集めた仕事唄やわらべうたから、韓国のリズムが基礎からすでに三拍子であると考えすることは出来ない、と発言した。

礼儀正しい韓国の人たちの表情の中にも、意外や驚きの色とともに、明らかに私の発言に不賛成の声もきかれた。多分私の言い方が悪かったためと思われる。私があのような圧倒的な芸術音楽・民俗音楽の三拍子を過小評価しているような印象を与えたからだろう」(小泉1977:66-67)

この小泉の講演に対する韓国側聴衆の反応を具体的に知る資料は、管見の及ぶ限り存在しない。またその後の韓国のリズム研究において、この小泉の説が引き合いに出される例も知らない。小泉による韓国リズム論が、韓国でどのように評価されたのか、あるいはされなかったのかについて、さらなる調査の余地があると思われる。

4) 本調査の意義

このように、本調査における小泉の最大の関心が、韓国音楽のリズム、とりわけ『三分割リズム』の起源問題にあった。実は小泉にとってこの問題は、民俗音楽におけるリズム様式の形成過程論、その形成過程に関わる労働とリズムの相関性というテーマに連続するものであった。

小泉は『日本伝統音楽の研究1』の刊行後、その続編にあたる『日本伝統音楽の

研究2』でリズムを包括的に論じる構想をもち、1962年から63年にかけて『日本のリズム』と題する雑誌連載を展開していた。しかし『日本伝統音楽の研究2』はついに刊行されることがなかった。小泉の没後に、小島美子、小柴はるみの両名が『日本のリズム』の原稿に、執筆メモを付加する形で編集し『日本伝統音楽の研究リズム』と題して刊行した(1984)。このリズム論が未完に終わった理由は、著者の多忙もさることながら、前著の時期よりもはるかに情報量が拡大したなかで、前著と同様の比較音楽学的視座を維持しながら、日本のリズムを総合的に論じることの困難を感じていたからであろう。

とはいえ、リズムの形成に対する小泉の関心は、1960年代前半から長く保たれ、彼独自の興味深い仮説を伴いながら、さまざまな形で表現された。労働とリズムの関係については、前述の連載『日本のリズム』のうち『労働のリズム』の項目において、仕事唄のリズムに対して労働の要素がいかに入り込むかを、四つの場合に分けて論じた。すなわち、①拍の強調、②カケ声や合の手(による拍節の強調)、③前・後からなる2拍子以外の新たな拍節法、④労働がもつ周期が音楽の拍節を乱す、あるいは両者が無関係に並行する、の四種である(小泉2009:348-356)。また、『日本のリズム』と題する別の論考(初刊1969)では、生業形態がリズム感の決定要因の一つであることを認めつつ、日本の仕事唄における、一見奇妙な事例を挙げて、音楽の非日常性がリズム形成に関係することを説いた。すなわち『仕事唄』といわれているものには、実際の労働に直結しているとは限らず、労働の合間や、労働が終わった後に歌われるものが多く、それらは実際の労働のリズムとはかみ合わない、ということである(小泉1977:39-43)。

韓国調査で小泉が後者の仮説を念頭においていたことは疑いない。小泉が民俗音楽のなかでも特に仕事唄、しかも実際の仕事の現場に強く固執した理由もここにある。この韓国調査の結果は、小泉がそれまで抱いていた、『仕事と直結した歌から仕事を離れた歌への移行が、民俗音楽の発展段階において重要な境界線となる』という仮説を裏付けたという意味で、小泉の研究関心にとって大きなステップとなった。

さて、韓国音楽のリズムに関する小泉の主張は、その後、独特の『騎馬民族』説への傾向を見せるようになった。1973年から75年にかけて口述された講義の録音

にもとづく著作『民族音楽の世界』(1985)で、小泉は次のような発言を行った。

「朝鮮の大衆芸能の特徴は、『跳びあがる』ことにある。…細かく拍手[拍子の誤りか]をとりながら等しく膝を屈伸させて上下動する動作は、まるで馬に乗っている人たちを連想させる。これはまさに騎馬民族のリズムではないか。馬の上でゆられる規則的な上下動から自然に備わったリズム感が三分割リズムである。彼らはふつうの状態では確かに地面の上を歩いているのだが、ひとたび芸能ということになると、とたんに馬に乗った気分になるのだ。…現に[騎馬民族としての長い伝統を持つ]朝鮮半島、中央アジア、ペルシャ、トルコなどの国々では、基本的なリズムは三分割である。地理的に日本にもっとも近い隣人、血縁的にも文化的にも民族的にも私たちと もっとも近い関係にありながら、音楽的底辺の根本のリズム感が違うということは重要である」(小泉1985:60-61)

同様の主張は、作曲家・團伊玖磨との対談において、さらに自由な形で語られた。

「いわゆる民謡とよばれてみんなが楽しんで歌うものは、じつはすでに仕事から離れてしまっているのですね。ところが日本人はそのとき三拍子にならないのに、韓国人はなぜ三拍子になるのか。私の推定ではたぶんそれは騎馬民族だからだと思うのです。…私はいくらか乗馬をやるのですがその経験からいいますと…馬が四回跳ねるところを人間は二回跳ねるわけです。そのためにはどうしても乗っている人は自分で積極的に上下動をしなければだめです。こうなると非常に楽にいくのです。これは気持ちのいいもので、地上を歩いているのとはまったく違います。…それが歌に表れるのでしょうか。…実際ユーラシア大陸で馬を使っていた民族を見ると、上下動の要素でない解釈できないリズムがずっとあるのですね。」(團・小泉1976:182-183)

小泉がここで持ち出した『騎馬民族』というキーワードは明らかに、かつて江上波夫(1906~2002)が提唱した『騎馬民族説』に由来する。江上は、紀元4世紀の日本に、騎馬軍団を率いた支配階層が朝鮮半島を經由して大規模に渡来し、それが大和朝廷の源流となったと説いた(江上1967)。この大胆な仮説は、日本国家お

よび文化の起源論として、激しい議論を巻き起こした。小泉が韓国の音楽に「騎馬民族」の痕跡を見いだそうとするのは江上の影響以外に考えられない。

「騎馬民族」とリズム感とを結びつける小泉の意見は、彼の弟子である小島美子に直接的に継承された。小島は日本各地の民俗音楽に日本音楽の「古層」を見いだそうとする試みのなかで次のように述べた。「牧畜民と私たち[日本人] のリズム感は異なる。…もともと牧畜民である朝鮮の人たちの踊りも、肩から上下に動き、強い拍と弱い拍の区別がはっきりしており、しかも三拍子が中心で、実にダイナミックである」(小島1982:10-11)「騎馬系の人々や馬の産地の人々は、朝鮮の人々のようにダイナミックに、あるいは三拍子で(?)踊ったのではないだろうか」(小島1982:286)。ここで「騎馬系の人々」とは何を指すのか具体的には明らかでないが、小泉を経由した江上の説が小島へと流れていることをこの発言から読み取ることができる。

しかし小泉が説く「音楽版・騎馬民族説」の論証は、韓国音楽に限ってみても、おそらく不可能に近い。そして小泉自身がその論証不可能性に気づいていなかったとは考えにくい。私見によれば、この意表をついた発言のねらいはむしろ別のところにあったと思われる。それは、韓国にみられる特徴的なリズムを、韓国「独自」のものとするよりも、大陸ユーラシアにつながる、より大きな伝統の一部としてみることを提案した、ということである。ちょうど彼が日本音楽の諸特徴を日本独自のものとはみななかったように、韓国音楽に対しても、つねに周辺諸国との比較の上で位置づけることを促した点に、この発言の真意を読み取るべきであろう。

4. 第2回韓国調査(1978年)

1978年、小泉にとって二回目となる韓国調査は、同年に開催される文化庁芸術祭主催公演「第二回日本民謡まつり」に済州島民謡の歌手を招聘するための準備として行われた。

「日本民謡まつり」とは、文化庁主催、芸術祭特別公演として企画されたもので、1977年から1994年まで、国立劇場を会場として毎年開催された。その趣旨は

日本各地の民謡、しかもあまり知られていない郷土民謡を、ひとつのステージで紹介することにあつたが、第一回以降、アジア各地の民謡を客演として招くことを通例とした。このようにアジアの民謡歌手を招聘するアイディアはこの公演の企画委員であつた小泉によるものと推測される。小泉は第一回から逝去する第七回(1983)まで毎年、公演の司会をつとめ、⁶⁾また海外事前調査にも赴いた。なお小泉没後の第十一回(1987)からは「日本民謡まつり」という名称に「アジア・太平洋うたとおどりの祭典」が付加され、オセアニア地域からの客演を含むようになった。

「第二回日本民謡まつり」は、1978年9月26日、27日の二日にわたり、計三回の公演が行われた(すべて同一のプログラムだったようである)。この時の海外客演は、韓国(済州島)とトルコであつた。もっとも、同公演のパンフレット(資料室所蔵、資料番号01293)に小泉が記すところによれば、この二ヶ国の組み合わせが特に意図された結果ではなかつたようである。済州島民謡を客演に招聘するという考え自体が小泉によるものかどうかは明らかではない。

小泉のフィールドノート(資料番号01036)によれば、旅程は1978年3月28日から4月2日までの五泊六日であつたが、目的地・済州島での滞在は3月30日と31日のわずか二日だけであり、その他は経由地のソウルで過ごした。「日本民謡まつり」の事前調査はこのようにきわめて短期間でなされるのが常であつたらしい。到着後は日本大使館職員、韓国文化広報部の担当官、ソウル大学校音楽大学の全鳳楚学長らと面会した。1972年調査で協力を得たソウル大学校の教授陣、李恵求、張師勛、韓萬榮、李在淑各氏の名もノートに記載されている。また到着翌日の3月29日に、文化会館別館で開催された「韓国人間文化財総合芸術祭」の第二日を観覧したらしい。済州島では済州道広報室の担当官の案内と済州道観光協会職員の通訳をうけた。

3月30日には到着後すぐに北村里に移動し、海辺の食堂において、北村郷漁村契海女会の歌唱による民謡の収録を行った。翌3月31日には済州KALホテルで、済州市内在住の李女修(当時53歳)から民謡を録音した。それぞれの収録曲と演

6) 小泉資料室には、小泉が使用した司会者用の台本が数冊残されているが、第二回の台本は現存しない。

者については後述する。

フィールドノートに挿入されたメモ紙(小泉の筆跡ではない)によれば、この事前調査の段階で、招聘者と上演曲目、およびその順序まで暫定的に決めていたようであり、そのメモ通り、李女修、金住玉(当時54歳)、金明子(当時31歳)の3名が招待された。ただし同メモに記された曲目と曲順は、①「畑をふむうた」 ②「オドトキ」 ③「海女のうた」 ④「旦那さんのうた」[ヨンガムノレか?]となっていたが、実際の公演では②と③が入れ替わり、④が「ソウジェソリ」に変更された。

小泉がこの調査期間中に行った、主たる目的以外の研究関連の活動は、上述した人間文化財公演の参観以外には不明である。この機会に書物およびレコード数点を入手した可能性があるが具体的な裏付けはない。

5. 現存する音源資料の状況

小泉資料室には、1972年調査の現地録音を収めたオープンリールテープ5巻(テープ番号0259~0263)、同じく1972年調査の現地録音であるカセットテープ8本(カード番号CA064~071)、および1978年調査に關係するカセットテープ2本(カード番号CA060~061)が、それぞれ残されている。1972年調査ではオープンリールとカセットテープが併用され、1978年調査ではカセットテープだけが用いられたようである。その他に、これらの現地録音を複製、編集してつくられたテープ、関係者から提供された音源を収めたテープおよびその複製も保存されており、韓国に關係する音源を収めたテープとして、オープンリール80巻、カセットテープ14本が小泉資料室に残されている。それらの音源は保存のためにDATおよびPCM録音に複製された。現在それをさらにハードディスクに転換する作業を進めている。

1972年現地録音のオープンリール8巻のケースには、ただ「韓国調査①」~「韓国調査⑤」の番号のみが記されており、そこからその内容を知ることはできない。また同年のカセットテープのケースには、同様にふられた「韓国①」~「韓国⑧」という番号のほか、収録内容の概略だけが記入されている。その記載内容をテープ

ごとに整理したものが〈表 4〉である。ただ、この記載内容は相当に簡略なものであるため、録音内容の全容を知るには十分ではない。

〈表 4〉小泉資料室所蔵 1972年韓国調査カセットテープ一覧

カード番号	DAT番号	PCM番号	タイトル	内容(上段A面、下段B面)
CA064	C0064	C011-TR4	韓国①	前半 釜山わらべうた 梵魚寺の勤行
				慶州の仏国寺 石工の音と歌 慶州市立国楽院
CA065	C0065	C011-TR5	韓国②	義城の木挽 栄州の砧 栄州カトリック教会
				栄州中央教会礼拝
CA066	C0066	C011-TR6	韓国③	栄州時調 時友会 時友会つづき(半分まで) 田草取唄 ソウル民俗舞踊団
				ミュンヘン派遣大韓国民俗舞踊団
CA067	C0067	C012-TR1	韓国④	民俗舞踊団(農楽) 八百屋の声 ソウル聖心国民学校わらべうた
				ソウル国師堂の巫女
CA068	C0068	C012-TR2	韓国⑤	巫女の助手の祈り 巫女の続き 国楽院の伽倻琴教室
				ソウル国楽院 上演と各教室 서울市奉元寺における法要(49日)実況
CA070	C0070	C012-TR4	韓国⑦	奉元寺声明3曲 音楽大学の録音 大笏ソロ 短簾ソロ 伽倻琴散調 大笏ソロ
				杖鼓リズム型 全州の杖鼓、歌、唱劇、農楽
CA071	C0071	C012-TR5	韓国⑧	全州国楽院 伽倻琴散調 民謡 牛の市場 農林高校農楽
				農楽つづき くず屋

次に、実際のテープの聞き取りによって把握できる収録内容をフィールドノートの記事と照合させて整理したものが、次の〈表 5〉である。

〈表 5〉1972年調査 オープン・カセットテープ収録内容(詳細)

オープン番号	カセット番号と面	内容	演奏者または収録地	音盤該当トラック	
0259-AC	---	梵魚寺 鐘、太鼓、読経	梵魚寺		
	---	水宮 農疋農楽 苗取り唄(女性)	釜山市水宮	9	
	---	水宮 農疋農楽 草取り唄(男性)		10	
0259-BD	---	水宮 農疋農楽 トウレック	東萊温泉洞	5,6	
0259-BD	CA064-A	わらべうた(まりつき、お手合わせ、ゴム跳び、じゃんけん)	梵魚寺	16,17	
		梵魚寺(1)鐘と太鼓		18	
		梵魚寺(2)夕方の礼仏		18	
	---	梵魚寺(3)般若心経			
	---	梵魚寺(4)千手経			
	---	梵魚寺の説明(日本語)			
	---	梵魚寺の説明(英語)			
---	CA064-B	石柱を直す作業に伴う音	仏国寺の石工		
---		作業とともに歌うアリラン			
---		作業とともに歌う流行歌			
0260-AC			壽斉天	慶州市立国楽院	
			千年万歳		
			咸寧之曲		
			天安三巨里(器楽合奏)		
			密陽アリラン(同)		13
			珍島アリラン(同)		
		伽椰琴併唱 春香伝より思郎歌		23	
---	CA065-A	木挽の歌 アリラン	義城		
---		同 流行歌			
---		砧の音(2人で打つ)	榮州青和旅館		
---		同上			
---		砧の音(1人で打つ)			
---		砧を打ちながら歌う アリラン		7	
0260-AC			榮州カトリック教会のミサ	カトリック教会	

0260-BD		(つづき)		
	CA065-B	栄州中央教会(プロテスタント)の礼拝	中央教会	
0261-AC	CA066-A	平時調の練習	栄州時友会	22
		辞説時調		
		女唱叱音		
----		男唱叱音		
----		辞説時調		
----		羽調叱音		
----		平時調		
----		辞説時調		
----		女唱叱音		
----		男唱叱音		
	CA066-B	刻時調	浮石寺村住民	
		ヨックム時調		
		刻時調(再録音)		
----		田草取唄(1)		8
----		田草取歌(2)		
	CA067-A	曲名記載なし(シナウィカ)	大韓国民俗舞踊団	
		アリラン		
		曲名記載なし(郷楽呈オカ)		
		上記曲の続き		
		曲名記載なし(扇の舞を含む。舞踊劇か)		
		鶴舞		
		曲名記載なし(男女デュエット)		
		鈴と扇の舞(太平舞か)		
	秋の踊り			
	CA067-B	民俗舞踊団(農楽)	ソウル市内 (詳細不明)	
		八百屋の声		
		わらべうた(ゴム跳び、まりつき、縄跳び、お手合わせ、絵描き歌、からだ遊び、となえうた)	ソウル聖心国民学校	1,2,3,4
		売り声 (ニンニク売り、廃品回収、野菜売り)	ソウル市内 (詳細不明)	
0261-AC	---	チノギクッ 將軍ノリ	ソウル国師堂 チョン・ヨンスク 巫女	14
	CA068-A	同 祖上クッ		
	CA068-B	同 巫女の助手の祈り(捧げもの)		

		同 大監ノリ		15	
---		国楽院の伽倻琴教室			
0262-AC	CA069-A	歩虚子	国立国楽院	24	
		春鶯轉		25	
		大琴ソロ(上靈山)			
		劍舞		26	
		伽倻琴散調			
		舞鼓			
		---		へぐム教室	
		---		玄琴教室	
---	ピリ教室				
---	大琴教室				
---	CA069-B	四十九日法要 和請	奉元寺		
---		同 由致聲			
---		同 由致聲(孤魂)			
---		同 振鈴偈(孤魂)			
---		同 七如来			
---		同 莊嚴念仏		20	
---		同 功德偈		20	
---		同 普礼			
---	同 法性偈				
---	CA070-A	引聲	奉元寺 朴松庵、曹徳山、金華潭	19	
---		鳴香	朴松庵		
---		合掌偈	朴松庵、曹徳山、金華潭		
0262-AC		清聲曲	ソウル大学校 大琴：朴鐘大	27	
0262-BD		CA070-A	艶陽春	短簫：朴鐘大	
			伽倻琴散調	伽倻琴：李在淑 杖鼓：安惠蘭	
			清聲曲(再録音)	大琴：朴鐘大	
			杖鼓リズム型の試演	杖鼓：安惠蘭	
0263-AC	CA070-B	短歌	全州国楽院 唱：鞠光美 鼓：洪龍虎		
	パンソリ 春香伝より愛の歌	唱：鄭美玉 鼓：張金東			

		農楽	羅錦秋	
		農夫歌	唱、杖鼓：羅錦秋 唱：鄭美玉 ケンガリ：洪龍虎	
	CA071-A	伽倻琴散調 成錦鷹流	全州国楽院 伽倻琴：薛錦玉 杖鼓：洪龍虎	
		珍島アリラン	唱と杖鼓：洪龍虎 伽倻琴：薛錦玉	
		六字ベギ	唱：洪龍虎	12
0263-BD		伽倻琴独奏 天安三巨里、ボンタリョン、ニッリリヤ、太平歌	薛錦玉か	
---		牛の市場	全州～南原間	
---		農林高校農楽 サムチェ		
---	同 チルクッ～ホホクッ	全州農林高等学校	11	
---	CA071-B	同 杖鼓ノリ		
---		古物商のハサミの音	慶州市内	
0263-BD	---	エミレー鐘	国立慶州博物館	

このリストから明らかなように、レコード「アリランの歌」に収録された演奏・演唱は、オープンリールとカセットテープの両方から採用されている。野外での録音でカセットテープレコーダーが使用されているのは当然であるが、取材の最初の数日は電源の問題からオープンリールの収録が中断を余儀なくされ、カセット音源がレコードに採用されたケースもある。全体としてみると、レコードに採用された音源は全テイクの五分の一程度に過ぎない。採用されなかったものの中には、八百屋の売り声、古物商のハサミの音、石工が石を加工する時の音など、労働に自ずと付随する音が含まれており、小泉の関心が労働とリズムの問題にあったことを明確に表している。ただ、これらが採用されなかった理由は、録音時のデータが不十分であったためと推測される。一方、パンソリのように、当然含まれるべき重要なジャンルでありながら採用されなかったものは、ノイズの混入など録音状態不良にその原因があると考えられる。

テープに残された音源を聴くと、小泉が英語もしくは日本語でインタビューを行ったことがわかる。日本語を解する韓国人が同席して通訳を果たす場合もあるが、なかなか意思疎通ができず苦勞する姿も垣間見える。たとえばレコードで

浮石寺村』となっている収録地点では、小泉が英語で地名を聞きだそうとしているが、それが相手にうまく伝わらずにいる様子が、テープに残っている。テープに残された韓国語の会話は、小泉によって情報として利用された形跡がないが、これに対する聞き取りを行うことで、収録曲や収録時の状況について、より正確な情報が得られる可能性があることを指摘しておきたい。

一方、1978年調査に関するカセットテープ2本についても同様に、カード化された情報は簡単なものに過ぎないため、ここでフィールドノートの記述に依拠しつつその具体的な内容を楽曲単位で示す。〈表 6〉の通りである。ただしCA060にはテープのカウントが記されているのでそれをあわせて示す。

〈表 6〉 1978年調査 カセットテープ収録内容(詳細)

カード番号	タイトル	面	カウント	楽曲等	演者
CA060	韓国・ 濟州島民謡	A	007-138	イヨドサナの練習	濟州市北村里魚村契 海女会
			140-	説明	
			158-	NG	
			161-282	①イヨドサナ(海女の歌)	
			313-	NG	
			326-438	②イヨドサナ(同上)	
			444-494	③メットル(粉ひき唄)	
			504-513	笑NG	
			519-	NG	
		523-543	④マダンチル(庭仕事の唄)麦打	李成仁、李玉女	
		B	016-057	オドルトギ(農夫歌)	李女修
			092-138	イヤフン(同上)	
			157-194	イヨドサナ(海女の唄)	
			230-253	ヨンガムノレ(老人の唄)	
			286-	NG メットルノレ	
296-319	パッパムヌンノレ(馬追い)				
CA061	濟州島民謡 (日本民謡まつり)	A		オドルトギ(農夫の歌)	金住玉、金明子
				ソウゼソリ(巫女の歌)	
				パルパムヌンソリ(馬追い)	
				ヘニョノレ(イヨドサナ)	
				オドルトギ(8節まで)	

6. まとめ

小泉文夫はかねてから韓国音楽に深い関心を寄せていたが、実際に韓国の地を踏んだのは二回に過ぎず、本格的なフィールドワークは1972年の一回にとどまった。しかしこの調査は、リズム感の形成をめぐる小泉の長年の問題意識を強く刺激し、「無意識の音楽」と「意識された音楽」との間に横たわる境界の重要性を、小泉に改めて認識させるものとなった。そうした小泉の問題意識を反映し、1972年調査で収録された音源は、仕事の現場における音や声の実践や、子どものわらべうたを重視したものとなった。特に前者を意識的に収録した事例がさほど多くないと考えられることから、本調査の音源は、1970年代前半におけるそれらの実態を物語る貴重な資料となったと評価できよう。また完全なものではないが、仏教、巫俗、キリスト教儀礼音楽の録音も同様に、この時代の宗教音楽の記録として注目に値する。今後はレコードに収録されなかった楽曲や、韓国語の会話ゆえに埋もれた情報を、残存音源から発掘することが求められよう。それが、小泉が残したこの音声記録の価値をさらに高めることにつながると信じるからである。

■ 参考文献

- 小泉文夫(1958). 『日本伝統音楽の研究 1』. 音楽之友社.
- 江上波夫(1967). 『騎馬民族国家』. 中公新書.
- 韓国国楽学会(1972). 『韓国音楽研究』 第2輯.
- 小泉文夫監修・構成・解説(1973). 『アリランの歌：韓国の民族音楽』 LP2枚組. ビクター音楽産業.
- 櫻井哲男(1975). 「済州島の民俗音楽－音楽人類学の試み(1)－」, 『音楽学』 21(2).
- 團伊玖磨・小泉文夫(1976). 『日本音楽の再発見』. 講談社.
- 小泉文夫(1977). 「三分割リズムと生活基盤」, 『音楽の根源にあるもの』. 青土社. (初刊,

1973).

_____ (1977). 『日本のリズム』, 『音楽の根源にあるもの』. 青土社. (初刊, 1969).

_____ (1979). 『韓国の音楽』, 『民族音楽研究ノート』. 青土社 (初刊, 1973).

_____ (小島美子、小柴はるみ編, 1984). 『日本伝統音楽の研究 リズム』. 音楽之友社.

_____ (1985). 『民族音楽の世界』. 日本放送出版協会.

草野妙子(2002). 『現地の研究者に大きな刺激を与えた小泉先生の調査』, 『小泉文夫の
遺産: 民族音楽の礎』 CD解説書. キングレコード.

小泉文夫(2009). 『合本 日本伝統音楽の研究』. 音楽之友社. (1958, 1984 刊行の2冊
を合本再版したもの).